

ナナイヤと 灰色のおおなみ

作●松居 友
絵●ふりや かほこ

女子パウロ会

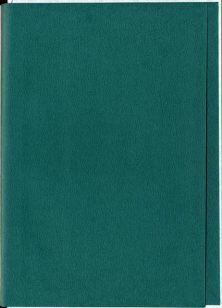




ナナイヤと
ナナイヤ
 灰色おおなみ

作・黒岩 良 監・山崎幸次

全11巻



第1章 ナゼイマ、ひらちでナロルに開文の

ナゼイマの村・77

開文の日・78

第2章 本の開文のナゼイマ

マイナースさんと本の開文のお話・77

夜更草・78

ナロルの村・79

第3章 ナゼイマと秋の夜更草

りんごのジャムつくも・82

開文のお話・79

第4章 ナゼイマと常の男の子

悲しい日・90



ピボロンの花壇・100

第5章 トロールに会いかけられたお話

ベッコイナおばあさんが、はうきでトロールを追いはらったお話・100

はじめてお話をすべも・108

ナゼイマとスザンナのお話し、トロールに会いかけられる・104

第6章 母さんとお父さん

ふよきの日・109

常文のお話・108

母さん・110

第7章 たんぽぽのまごころ

春の絵かきさん・104

たんぽぽのあくらしもの・108



ナダイヤと灰色のおおみ



ナダイヤ

中島輝子

第1章 ナディヤ、ひとりでもナロルに旅立つ



ナディヤの村

母さんがお産で世に別世になつたのは先日のことでした。

ナディヤが学校から帰つて来たとき、母さんは、倉庫でお菓子をたくらんでいます。家のなかは、わくわくするようなお菓子のにおいでいっぱいでした。

ところが、ナディヤが服を箱がえているとき、倉庫から「ナディヤ、ナディヤ」とよお母さんの声が聞こえたような気がしたので、おけつけると、母さんがしゃがんでいました。

「母さん、母さん！」

ナディヤはさげふと、母さんのもとにかけよりました。

「どうしたの、母さん、どうしたの。」

母さんが母さんをおひきして泣きおこし、からだがささやいてなみとがソファアーマーまでつれていって

たると、母さんはしほりたすような所ではないました。

「父さんや、よんで来て、お願ひい。」

「すぐによんでくる。」

ナディヤはきけよと、近くの村役場で働いている父さんのところへ、大急ぎで走っていったのです。

父さんは、やりかけの仕事をはきけよだして、大急ぎでかけつけました。

「マリヤ、マリヤ、どうしたら、だいじょうぶか。」

父さんは、青いそとな母さんをおひき手にできました。

「ナディヤ、急いでタチユカ先生をよんで来ておくれ。」

ナディヤは、服のひこくをからとびたすと、タチユカ先生のところにおかけていきました。先生のおたくは、石だまの壁をくぐったお隣のなまこやでした。

お隣の家に、息をききまわってかけこんできたナディヤのただこよはないうすに、おどろいたタチユカ先生は、顔もそこまこ大急ぎで、お母さんをおひき手にしめ、助けていたお母さんに息をあげる言葉をよびだし、ふとつたからたをふうふういわせながら奥道をのぼっていききました。

母さんは、父さんのおひき手にたかれたまま、青い顔をして苦しんでいます。

「マリヤ、タチユカ先生がきてくたまった、もうだいじょうぶだよ、じつかりするんだ。」

母さんは、かすかにほほえむと、うめくようにいいました。

「とつせん、おなかに痛みか……。」

タチユカの先生は、きつそくおぼんをあけると、輸送部をとりだして母さんをおみしました。

むすかしい顔をしています。

「よりあます、痛みをおわらけるとしよう、ナディヤ、お話をわかしておくれ。」

先生は、かばんから注射部をとりだし、痛み止めを注射部を打ちました。

ナディヤは、台所に行くし、母さんがお産子を働いていたキッチンストロブの残り火にまきをおく、火を入れたケルンをかきました。向こうの部屋では、父さんがタチユカ先生と話している声が聞こえてきます。

お母さんがいて、屋敷に運んだときには、母さんのようには少し痛みをついたようでした。

「痛み止めがきいてきたようだね、おじょうちやん、お産部とタオルを用意しておくれ。」

ナディヤが、お産部とタオルを用意すると、タチユカ先生は洗面部にお母さんを入れてタオルをひたし、しほりて母さんのひたいをふきながらいいました。

「とまどまタオルで産部をあたためてあげてくたさい、痛み止めがきいたら、産ちつくでしよう、しかし、ここはいるかたや、わたしにできることは一時しのぎにすぎない、なまてく早めに、大きな産の病院に入院する必要があるですね、マリヤスバの国立病院が最良なところのつて

はでよいと思いますが、もしよるしければ、わたしのほうから予約しておきますか。」

「この調子で、ぜひお願いします。」

「よろしい、もどつたのさつやくれんらくします。あさついでよいかね。」

「ええ、先生。」

母さんは、必死の覚悟がきいたのか、しばらくするとどうもよしほじめられた。

「マコドにねかまへ、お願ひにしてあげてくださう。」

タチエカ先生は、診察かばんをまとめると、父さんにいくつか注意じこころをいって去っていきました。

「夕方には、もう一度うかがいます。あすもね。」

「よろしくお願ひいたします。」

タチエカ先生が出ていっただけ、父さんは母さんをだくと、病室に連れて、ねまきに荷がえさせました。それからお調にサオカをひたしてしほると、母さんのおなかにあてました。母さんは静かにねわっています。

「母さんは、たいじょうです。」

「たいじょうぶぶぶぶぶぶぶぶ、タチエカ先生が手当てをしてくださったからね、ナディヤ、こゝろにおどろい。」

母さんのまぶたが少し開ちついたので、父さんは立ちあがるとリフトにこしをかけました。ナディヤがとどろきするのと、父さんはこぼれ涙がながれはじめました。

「だいたい、タチエカ先生がおっしゃったようにね、母さんは入院しなければならぬわ。町の大きな病院に入るんだよ、そこで手術をうけなくてはならぬわ。」

「誰いから。」

「いや、病院の技師があるからね、でもね、ナディヤ、母さんがすっかりよくなるためには、どうやら、半年ばかりそうなんだから。」

「かわいそうな母さん。」

「でも、悪い部分をとってしまえば、あつたおるだろう。父さんは、うきうきで病室するつもりだ。でもおまえをこの家にひとりで置いておくわけにはいかない。どうしたものかなあ。まあ、落ちついたら、母さんと相談してみよう。」

ナディヤは、うなずきました。

ナディヤの村には、小さなお城があります。

村のまんなかには山が覆れていて、石でつくった橋がかかっています。そこに立ってながめると、お城は山の上から対岸の家のいえを見おろすようにたつたてられているのです。